

兵庫県産昆虫類研究史概説(4)*

高 橋 寿 郎

昭和～現代の兵庫県の昆虫研究

昭和即ち現代の兵庫県下の昆虫研究は第2次世界大戦を境として戦前、戦後に別けてみよう。

当然昆虫学の発展は大学、各種官公庁が中心となってきたが各地方に出来た昆虫趣味の者達の集い、所謂アマチュアの研究機関の発展によって非常に前進がみられ特に関西地方はアマチュアの研究が中心となってきたことは注目に値する。

大阪の寺西暢、戸沢信義、岩田正俊、京都の竹内吉蔵、松岡良弘の諸氏が設立した“関西昆虫学会”は昭和5年から会誌を発行(関西昆虫学会々報、時報、関西昆虫雑誌)、兵庫の昆虫研究者もこれを中心に研究を発表するようになった。

一方、県下の学校の先生を中心として“兵庫県博物館”が結成され、会誌の創刊されたのは昭和6年(1931)のことである。さらに昭和12年には兵庫県中等教育博物館が発足、会誌が発行された。これらの会誌には昆虫の記事が大変少い。即ち昆虫の研究者の県下に少いことが想像出来る。当時大阪で活躍していた小林馮次氏を招いて昆虫採集指導を受けていた時代である。終刊近くになって米谷正司氏とか私などが研究発表をした。むしろ純アマチュアとして当時吾々の智識向上に非常に助けとなった“昆虫界”、(昆虫趣味の会機関誌・昭和8年創刊)を中心とした住吉の関公一氏、六甲の小林桂助氏の活躍がめざましい。小林氏は鳥の研究者として著名な方であるが、当時六甲山を中心とした昆虫調査をしておられた、戦後から現在にわたり再び鳥中心の研究で活躍しておられる。関氏も同じく会社に勤務のかたわら甲虫類、特にカミキリムシの研究をしておられ御影を中心とした、摩耶山、六甲山をふくむ甲虫相の調査発表、県下のカミキリムシの目録を発表しておられ、戦後いち早く“新日本産天手科目録”を自刊された。多くの標本文献類をお持ちであった。昭和13年(1938)、米谷正司、沢野芳介氏らを幹事として昆虫趣味の会神戸支部を結成その部報を同年4月発行された。その後同支部は感情問題から再編成され幹事に野村全、谷口和義氏を任命継続された。阪口浩平氏も部員に入っておられた。私も入会部

報に報文を発表したり採集会に出席したり関氏の御宅にも何度かお伺いした。米谷氏の御宅も何度か訪問したが、氏は後標本商のようなことをやっておられた。関公一氏も1969年亡くなられた。後継者がおられないようなので貴重な文献、標本類の散佚が心配である。米谷氏も亡くなられた(標本の行方もはっきりしない)。沢野氏の消息についても知らない。野村全、谷口和義(黒佐)、阪口浩平氏等々は夫々元気で現在も活躍中であることは御承知の通りである。

戸沢信義氏は昭和37年(1962)昆虫研究50年の御祝をされた県下の昆虫研究者の大先輩であり、蜂の研究者として知られている。御宅も甲東園にあり県下の昆虫を調べ後輩の指導にあたっておられるが、初期の研究の中に箕面の昆虫を調べた“箕面山昆虫目録”、(1932)が有名である。氏は関西昆虫学会の指導をされると共に宝塚昆虫館長として同館報の発行(昭和15年1940、9月創刊)をされ(宝塚昆虫館の出来たのは昭和14年—1939、8月)、戦後は神戸生物クラブの顧問として活躍しておられる。戦前の各中学校(現高等学校)にも生物クラブの結成活躍があったが、なかでも甲南高校生物学教室の“博物研究”、神戸一中(現神戸高校)の“一中付近の昆虫”、神戸二中(現兵庫高校)の“Natura”が知られている。戦後になると県下にも農大が出来て、そこには蜂の研究で有名な岩田久二雄博士、ハバチの権威・奥谷禎一博士、シギアブの研究の永富昭博士、ハチの生態研究の宮本セツ博士と多士済々で、いずれも膜翅、双翅目の研究者である。明石にはオサムシ、ゴミムシの研究者として知られる石田裕氏(現神戸商大)がおられる。岩田久二雄博士は昭和45年3月(1970)定年退職され、その後は昆虫の観察と著作に自適の生活を送っておられる(神戸大学名誉教授)。農大は神戸大学農学部と変って現在奥谷博士が中心となって活躍がおこなわれている。

また、農大生の同好者湯浅浩史、辻啓介氏等が中心となって扇ノ山の調査を主体に“兵庫農大生物研究部々誌”を発行しておられた(辻氏は現在国立栄養研究所勤務、1975年にはテキサス大学へ留学、兵庫県の甲虫相調査を継続しておられる。湯浅氏は東京農大育種学研究所におられる)。柏原では現大阪教育大学付属高校池田校

*兵庫県甲虫相資料、53。

舎教頭の山本義丸氏を中心となって水上郡下の昆虫相を調べられ実に立派な“水上郡産昆虫目録,, (1958)を発行約3,000種の水上郡の昆虫が記録されている。山本氏自身は蛾の研究で有名な方であるが、その後を引継いで高橋匡氏が中心となり柏原高校生物研究会を指導、その会誌も毎年発行されて(会誌名 Natura)水上郡のみならず水ノ山を中心とした研究をされ、私も柏原高校で所蔵標本を見せて頂いたが、実に立派な管理状態にあり、山本、高橋両氏の御好意で多くの標本を御恵与頂いているし、目録作製にはコガネムシ科の同定をさせて頂いた。高橋氏は後出石高校に転職され、1964年には“出石郡昆虫目録,,を発表されている。さらに現在は豊岡高等学校に教鞭をとられ、1975年には“豊岡高等学校昆虫標本目録,,(第1・2・3報)を発表但馬地区の昆虫相調査を精力的にやっておられる。

戦後の県下昆虫相否生物相にとって忘れることの出来ないものに“兵庫県生物学会,,の発足がある。県下の学会としては現在之しかなく唯一の学会として注目されてよい。機関誌“兵庫生物,,も順調に発行されている。会長に故森為三博士、私の恩師竹の博士として有名な室井紳博士が中心となってスタート、会誌の創刊は昭和23年3月1日(1948)である。

この会誌は県下の昆虫相の究明に大いに貢献している。蝶の山本広一、吉阪道雄、蛾の山本義丸の各氏、私の甲虫と毎号誌上で発表されている。

学校関係では兵庫農大の紀要がある。また前記農大生物研究部々誌、長田高校生物部の“Shida,, 1号限りであるが、“Tritoma,, 甲陵中学校生物部の“甲陵生物,,というのがある。

昭和31年(1956)秋第11回国民体育大会が兵庫県で開催され、それを記念して兵庫県生物学会並びに神戸新聞社企画のもとに神戸新聞会館で“兵庫生物展,,が開かれた。これには蝶の山本広一、吉阪道雄氏、蛾の山本義丸氏、甲虫の私が出品、それを記念して“兵庫県生物誌,,を発刊した。

その後、昭和34年(1959)には六月社から“国立公園、六甲の自然,,を室井博士を中心に発刊、私も昆虫関係を担当した。また同書のジュニア版が出版された(国立公園、ジュニア六甲、1961)、さらに“のじぎく文庫,,から“兵庫の自然,,(1960)、“続・兵庫の自然,,(1969)が出版され“明石の自然,,も1963年に出版された。1976年は兵庫県生物学会創立30周年にあたるのでその記念に“兵庫の生物記,,(のじぎく文庫)が出版される。

神戸大丸では昭和14年(1939)神戸博物同好会を結成、中林馮次、山鳥吉五郎氏を顧問に紅谷・河原・川崎の諸氏等をも加えて会誌“博物趣味,,を5号迄発行されたが、その後中断された。戦後“神戸生物クラブ,,を結

成、こんどは会誌の発行はないが毎年4月~11月の間月1乃至2回の採集指導会を小・中学生を対象に開催している。既に20年近くも続いている。8月終りには鑑定会、9月に展覧会も恒例行事となっている。顧問としては昆虫担当は戸沢信義、大倉正文、岡本清、山本広一、猪股涼一等々の諸氏と私とである。昭和50年で神戸生物クラブと改名して20年、その記念行事の一つとして同年8月10日奥谷国有林の採集会を特別例会として開催された。

昭和30年(1955)には大倉正文、石田裕氏等が中心となって“神戸昆虫同好会,,を結成、その後現在迄月一回の例会を確実にやっている。この会は機関誌を発行しないので一般には余り知られていない。昭和51年2月例会が第251回例会である。例会は採集会と冬の間の談話会であり目星しい地点はほとんど調査に出掛け最近では兵庫県以外への採集会が多い。談話会では色々ニュースの交換がある。大倉正文氏は日本甲虫学会幹事で、オサムシ類、水棲甲虫、トンボの研究者として知られており、御宅も六甲山麓にあり県下昆虫相究明に努力されている。

西宮には虫同友会が結成され、その会誌“M・D・Kニュース,,が昭和25年(1947)から発行された。昭和47年11月には創立満25周年記念号が発行され(1972)兵庫に関する記事も多い。例会も開催され昭和46年11月が第181回例会となっている。ただ残念ながら本会も時代の流れで昭和49年には転換期に達して中断された。引継ぎ若林守男氏を中心となって維持されるようである。

昭和41年(1966)兵庫県下の“虫や,,の連絡的機関として“兵庫県むしの会,,が奥谷博士、県植物防疫の仲田氏、農試病虫部の宇部部長、山口、猪股、大倉の諸氏と私等が発起人として発足“兵庫県むしの会々報,,も2号迄発行されたが、世話人がそれぞれ多忙過ぎて会の運営がうまく出来ず自然消滅の形になってしまったのは残念である。

昭和38年(1963)には室井博士の御世話で市立明石天文科学館講堂で“世界のきれいな虫と貝とかたつむり展,,(故古川博二先生と共同出品)を7月21日~8月31日間開催、昆虫標本46箱と“昆虫切手,,とを出品、解説文並びに神戸新聞紙上(8月1日~8月19日号)に“ママはコン虫学者,,と題して県下の昆虫の概説を発表した。翌39年(1964)には同じ場所で“県下特産生物展,,が開催された。

西宮市甲陽園にはノミ博士の阪口浩平博士がおられる(日本産ノミの研究論文で理学博士の学位をとられた)、戦前はハネカクシを研究しておられた私も同定を御願いしたこともあるが、戦後はノミの研究と生態写真に力を注いでおられ立派な論文の発表もあれば素晴らしいノミのコレクション。昆虫のコレクション、ミニカーのコレ

クションを御持ちである（神戸新聞、46年7月13日号）、もとは造酒屋の社長さんであったが、現在京大講師で海外への採集を着々と実現しておられる。

西村 登氏は関宮中学校で教鞭をとっておられるが、氏は水棲昆虫の生態調査に次々と立派な業績をあげておられ、北部河川の虫相を究明されると共に今後の県下の昆虫研究のあり方を開明しておられる点特筆すべきである。

猪股涼一、岡本 清の両氏は多可郡西脇市を中心としての昆虫相調査につとめられ、その数多くの標本は当地区が極めて立派な昆虫相を呈することの証明となり、文献としてほとんど発表されているのが残念である（西脇自然同好会々報、Vol. 1, No. 1 のみが知られている。現在猪股氏は宝塚市、岡本氏は高砂市におられ、岡本氏は専ら蛾の研究、猪股氏は蜂の研究で最近立派な論文を発表しておられる）。

昭和46年（1971）5月、佐用郡南光町船越の瑠璃寺境内に県教委により県立昆虫館が設立されて県出身で東京にて標本商をやりながら平山博物館を設立昆虫研究普及に効績のあった故平山修次郎氏の標本の一部が寄贈されたりして内容の充実をはかっている。山崎高校の犬上教諭が中心となり生物部員が世話をしている。

神戸在住の方でアマチュアとして昆虫関係で次のような方が神戸新聞紙上に紹介されている、即ちハチの生態研究をしておられる足立順一氏（昭和46年1月）、蝶のコレクションを持っておられるとして人見 勝（昭和46年9月）、森 博氏（昭和47年5月）。

1967年には“氷の山・後山・那岐山国定公園候補地学術報告、”というのが日本自然保護協会調査報告、第32号として同会より発行されたが、昆虫の専門家がおらず折角の報告が昆虫に関しては全く価値のないものになったことは残念である。

県自然保護協会というものも設立された講演その他の活動は行われており、1972年に“扇の山周辺の動物（I）、”が発行され、その中で奥谷禎一博士の“扇の山および霧ヶ滝の昆虫相、畑ヶ平高原の広腰亜目、”、辻 啓介氏の“但馬扇の山の蝶類目録、”、辻 啓介・岸田剛二氏の“但馬扇の山の甲虫目録、”がふくまれ扇ノ山のファウナが明確になった。その後“兵庫県の自然、”と題する機関誌が発行されているが、昆虫に関する記事はほとんどなく学術的な報文誌でないのが残念である。

1972年には“扇ノ山周辺の自然を守る会、”から“扇ノ山周辺の自然保護、”という報文が刊行されたが、昆虫に関しては全く見るべきものはない。西宮市自然保護および利用に関する基礎調査研究報告書として“西宮市の生物相、”が刊行されている。また“猪名川旧河川敷の昆虫、”も出版されている。

神戸新聞では兵庫探検・自然篇が昭和46年9月よりとり上げられて昆虫に関しても珍しい種に就いて解説が試みられた。キベリハムシは兵庫県特産種として私の飼育中のものを中心に紹介された。

自然破壊がすすむ中でまず兵庫県にどのような昆虫が棲息しているか？これがわからなければ自然保護といっても役立たないと県下のファウナをまとめることを目的に奥谷禎一博士を顧問に辻啓介氏が中心となり、兵庫昆虫同好会が設立された。そしてその会誌“きべりはむし、”が1972年に発行され、現在年2回の会誌が発行され、県下ファウナに関する貴重な報文が発表されている。本部は拙宅にある。

淡路島には淡路昆虫同好会があり、その会誌“Parnassius、”が定期的に発行され同島のファウナの解明に努めておられる（同会も昭和51年が創立十周年になり特集号を発行する）。

神戸再度山の市立教育植物園に“自然昆虫園、”が昭和47年（1972）5月オープンした。カブト虫、ホタル、蝶の飼育を実施、生きたこれ等の昆虫を市民に見せようというもの。勿論網等持込厳禁である。

かねて兵庫県立博物館設立を望み兵庫県生物学会が中心となってその運動を行ってきたが、やっと昭和50年代前半に設立することを県教委で発表、昭和48年4月に設立準備室を置くことに決まると報道されている。真実そうなることを望みたいものである。

1972年頃から遅まきながら自然開発、地域開発に具う種々の問題が取り上げられ、それに関連して特定地域の生物相の調査があらわれ始めた。尤もこのような調査が開発にどの様に影響を及ぼしているかといえば全く何等の利用もされていない点お役所仕事の表面を糊塗した一行事に過ぎないと考えられるが、異った意味で昆虫相の思いがけない収獲があり参考になることが多い。例えば前掲“西宮市の生物相、”（1972）、愛媛大学農学部昆虫学研究室、石原教授を中心とした“本四架橋ルートの島々の昆虫相、”（1973）とか1974年の西村登氏による“加古川水系の底生動物相とその現有量ならびにそれに基づく生物学的水質判定結果、”（1974）のような特殊な研究があらわれている。

同じような目的で“東中国山地自然環境調査、”の一つとしてその報告書が奥谷先生の指導の下に兵庫昆虫同好会の方々と協力して“中国山脈東端の昆虫相、”をまとめて出版された（1974）。

昭和～現代の兵庫県の昆虫研究は多くの方々の各方面での活躍があり、それ等を列挙することは大変なことであり、大体のところを述べてきたが、また機会あれば詳しく記したいと考えており、脱落している点に就いて御教示頂ければ有難く思っている。（10-IV-1976）